

大寒の日

牧師 山本 護

よく知られた飯田蛇笏の「芋の露連山影を正しうす（大正3年）」。学業を辞して帰農した蛇笏が、己を律するかのように仰いだ南アルプス。今年の大寒の日、もの凄い北風で威厳ある甲斐駒や連山が、ぶるぶる凍えて山肌の雪を盛大に飛ばしていた。

蛇笏の息子、飯田龍太（1920～2007）が、大寒の日に山蘆（甲州境川村の飯田家）で詠んだ句「大寒の一戸もかくれなき故郷(昭和29)」。すべて農民で、学校教師や役場勤めの兼業になっても家々の諸々が知られてしまう。木々の葉はすでに無く、乾燥した空気で解像度高く一戸ごとの喜悲劇が隅々まで見通せます。

プライベートなどほとんどありえないムラ社会。これを嫌悪する者は多いけれども、教会というキリスト共同体が「一戸もかくれなき」だったらどうだろう（使徒2:44～45）、かえってその方が気楽なのではないか、とか、つらつら考えました。

「一戸もかくれなき故郷」、うまいっと感心しつつも、大寒に雪けむる連山を仰ぎ見、「家々も一人ひとりも雪のなか（拙作）」ではないかとも思いました。懐事情や不運が知られたところでどうだと言うのだ、肝心な所は分かり合えないじゃないか、という虚無です。

「たとえ、彼らが陰府に潜り込んでも、わたしは、そこからこの手で引き出す。たとえ天に上っても、わたしは、そこから引き下ろす。たとえ、カルメルの頂に身を隠しても、

わたしは、そこから探し出して連れ出す（アモス 9:2～3）」。そしてこう語られる。「わたしは彼らの上に目を注ぐ。それは災いのためであって、幸いのためではない（9:4）」と。

「災いのため」であって人間は「見つけられる」。兄弟姉妹同士分かり合えず、また私自身、自分のことをよく知らないけれども、神は確実に私を見つける。どこにいても、何をしていても、死を超えて私は（9:2）神のまなごしの内にあるという安堵。

「故郷」とは何か。山蘆で生まれ育ち、そこに住み続けた旧家の跡取りが生活の場を「故郷」と呼ぶよそよそしさ。故郷とは離れた地からの言い方なのに、飯田龍太は「かくれなき農民」に土着できない虚無の含羞から「故郷」と呼んだのかもかもしれません。

人間を見通すアモスの預言を「安堵」としましたが、龍太に倣って「虚無」の含羞も取りこぼさずに抱えていきたい。すると、どうなるのか。語りかけられる救いの預言が、奥行きをもっていっそうリアルになる気がします。安堵と虚無の二つの目によってΩ

